

わが国の植込型補助人工心臓の Destination Therapy

企画：縄田 寛

(聖マリアンナ医科大学 心臓血管外科)



HEART's Selection

心不全の患者は年々増え続けており心不全パンデミックとも言われる。その中で重症心不全に対する治療法として2011年4月にBridge to transplantation(BTT)での使用を保険償還された植込型補助人工心臓(VAD)であるが、HeartMate 3™のDestination therapy(DT)での保険使用が2021年5月に認められた。しかしながら、約1年を経て当初の想定ほど症例数が増えていない一方で、「植込型VADがDT使用できるようになった」という文言が一人歩きしている印象もある。

今回のHEART's Selectionでは、普段の診療で重症心不全治療に関わることの少ない人にも広くDTを理解していただければ、と「わが国の植込型補助人工心臓のDestination Therapy」というテーマを選び、各職種におけるVAD治療の第一人者に執筆をお願いした。

まず、東京大学医学部重症心不全治療開発講座の網谷英介先生に内科医の視点からDT適応となる患者群を含めて概説していただいた。次いで国立循環器病研究センター心臓外科の甲斐沼尚先生らには植込み手術を担当し、さらに術後の合併症にも対処する外科医の視点から、自験例を含めたDT治療の成績と装着後の医学的問題点を中心に記述していただいた。九州大学病院臨床工学部門の定松慎矢先生には、機器の管理ならびに患者・家族の機器操作指導を担当する臨床工学技士の視点からBTTとDTの違い、施設間連携のポイント等について論じていただいた。大阪大学医学部附属病院看護部の梅本桃花先生らには看護師・移植/VADコーディネーターの視点から、患者のみならずケアギバーの満足度が高い治療となるべき、との観点から執筆をいただいた。東京大学医学部附属病院リハビリテーション部の天尾理恵先生には、装着術前・術後のリハビリを担当する理学療法士の視点から、BTTとDTの患者背景の相違とリハビリ上の注意点を、実例を挙げつつお示しいただいた。最後に東京女子医科大学医学部精神医学講座の押淵英弘先生らには、心に葛藤を抱えがちで、さらには装着後に精神神経疾患を発症することもあるVAD装着患者のメンタルヘルスについての課題を精神科の観点から示していただいた。

重症心不全治療として本邦でも存在感を増しているVAD治療への理解の一助となれば幸いである。